

## 寄 書

日本の風景は東北にあり

岩手 藤

花

「日本の風景は東北にあり、東北は恰も、支那の蜀の如く、又歐洲の瑞西の如し。」とは誰か云つた語であります、實に我が東北の地は、風景の佳に富んで居ります、松島象瀉など昔から名のあつたのもずぬふんありますが、またあまり世間へ知れて居ないところにも、去り難い眺めは澤山存して居ります。

我が里はかゝるところにありて西には岩手の秀峯屹然として、その壯大なる姿を雲上にあらはし、北水の流れは中央の平原をうるはして太平洋にそゝいで居ります、實に雄大なる、壯嚴なる、他にあまりその比を見ないことと思ひます、かゝるところをとつて畫にしたならば、眞に大なる作が出来やうと思ひます。風景を愛する諸君、三脚を手にし、スケツチ箱を肩にして、我が東北の地に、壯遊を試みんとする人はありませんか。

海岸の一日

長野 パレット

此處は柏崎の海岸だ。私と親友○君とは砂原をザク／＼踏みながら彼方の丘に向つてゐる今しも海は午後の太陽に照りつけられて濃い濃いインデゴに染つてちぎれて飛んでゐる白い雲の下には佐渡が烟の様に霞んで二重にも三重にも重つてゐる。

丘には何とか云ふ尺ばかりの草が密生してゐる。はげしい日光に抵抗はしてゐる様なもの、葉はがサ／＼して光なく埃でも積つてゐる様だ。丘を下ると一寸した林がある。其中に這入つてだるい様な波の音を聞きながらスケツチした。

白つばい砂に入り亂れた幹に青い青い葉、丁度晚霞先生の小笠原島の畫にそっくりだと思つた。

三時間ばかりこびり付いて其處を出た頃は夕榮えの色鮮にオレンジ色の空には紫の雲が三つ四つ投げた様に浮んでゐて白帆も何時の間にか無くなり汽船の烟のみ長く／＼引いてゐた。後の山はどれもこれも順を追ふて黒ずんで行く。

CHANCE に就いて 一 會 友

漱石著「濛濛集」中の幻影盾に弁リアムが其戀人の父を夜鴉の城に攻むる數日前初夜過ぎに冷たい臥床の上に既往を考へ出す條りに左の様な處があります。

「……ある時は野へ出蒲公英の蕊を吹きくらをした、花が散つてあとに残るむく毛を束れた様に透明な球をとつてふつと吹く、残つた種の數でうらなひをする。思ふ事が成るかならぬかと云ひながらクララが一吹きふくと種の數が一つ足りないのと思ふ事が成らぬと云ふ辻うらであつた。するとクララは急に元氣がなくなつて俯向いて仕舞つた。何を思つて吹いたのかと尋ねたら何でもいゝと何時になく邪慳な返事をした。其日は碌々口もきかないで塞ぎ込んで居た……」(P.166) みづえ五十號



口繪の Chance も右と同じ様な意味では無いでせうか。

### モデル物語り

#### △ 生

美術の淵藪なる佛國巴里の畫學校へは、毎月曜日に男女十四五人のモデルが來て雇つて呉れると申込をする。直に裸體に成つて體格を見せる、其骨格や肉著が、畫ふと思ふ畫に適當である、四週間五週間の分を豫約する、學校には唯其の住所姓名を書き留めて置く斗りだが、決して違約せずに来る、併稀れに病氣や其他の事情で來ない事があつても、月曜日に來たのを臨時に補充するから毫も不自由はしない、如何なる物をも撰擇する事が出来るが、日本は若し豫約を外された時は、お三どんや乞食の娘の様な物でも満足しなくてはならぬ、又學校以外に畫師は畫室を持つて居る、此畫室は一區域を劃して北方モンマルトルは第一に隆盛で、次は南方モンパルナースで、其外東方西方と有るが、私は南方モンパルナースに畫室を持つて居つた。一棟の中には二三の畫室が有つて、其所にも一日に三人平均位に來て、何でも使つて呉れると云ふまあ體格丈けでも見て呉れると云つて見せる、赤髮のモデルが必要な場合に、赤髮のモデルが來なければ、友人に頼むと直ちに二人位は送て來る。モデルに二種の別が有る、一つは本業のモデルで、重に伊太利人で、佛國に來た祖先傳來のモデルで、夫婦子供も爺婆も一族でモデル營業をなして居る一團がある。其親戚の者も國許より來

つて其群に投ずる、其群の中には羅馬の古畫の如き骨格を有する物もある、此特種の顔や骨格を有する者の中に、キリストと稱する者があつた、鬚を左右に分け、鬚を長く延ばして肩の邊迄垂下して、鼻は高く細長く、細面で口髯は薄くて三十二三才位の男で手を垂れて説教する風を装つた、右の手を揚げて十字架上に登つた態度をするのでキリストの畫題を畫く者のモデルには好適であつた、又ギリシヤの勇士クラジセトールと稱する美術學校の常雇のモデルは筋の發達が圓滿で、體格はギリシヤの彫刻に酷似してゐた、年齢は二十四五才の壯士で、常に筋肉の發達に努めて居る、ゴオール人と稱するは、大兵の五十才位の男で髪は茶色の胡麻鹽頭で、口髯を支那人の如く垂らして妙な劍を横たへ、天を瞰む態度は、全然ゴオール人其儘で有る。又バツキユス(ギリシヤの酒の神)と云へるは、六十近き老人で、便々たる腹をもつて髪が長く鬚を生じ、德利やコツブを風呂敷に包んで携帯し、酒を飲で愉快だと云ふ風を裝ふ此等は重に伊太利人で、畫家が適當と認むるゴオール人やバツキユスに使用するから、モデルが自覺して、私はキリストですラジヤトールですと自稱する、斯いふ風であるからサロンの展覽會には、是も彼バツキユス、是も同じだと云つた様に、同一モデルの繪畫が澤山に出品される。

#### 三山亭より

奈良にて 長谷川繁兒